

七父の人生の軌跡

往時茫茫

—書き残しておきたい
元マニラ在留邦人の活躍と逃避行

菅原 惇



私の脳裡に残っている。当時の実相を知った私は、杉田義樹に対し大変申し訳ないことをしたと慙愧の念に堪えない。

杉田義樹は平成二年九月三日八十一歳で、宝塚市中山台の自宅で亡くなった。平成二十三年二月十九日亡父に代わって西宮市田近野町の仁川国際霊園にある故杉田義樹の墓に妻と一緒に参詣した。今は鬼籍に入られた杉田義樹に対し、深甚の感謝の気持ちで一杯である。

8 生還者濱田駿吉氏の証言

濱田駿吉は大和紡績社員であったが、比島での綿花増産のための産業戦士として選抜され、他の棉作担当会社の社員七十六人とともに昭和十七年六月二十三日宇品港を出港し、敵潜水艦が出没する危険海域（パシー海峡）を無事通過して、約一ヶ月もかかって昭和十七年七月十九日マニラ港に到着する。

なお、濱田駿吉より先発の第一陣の産業戦士を乗せて出港した大洋丸は、五月八日に日本近海で敵潜水艦に撃沈された（産業戦士八百十七人が海没）。

濱田駿吉は、当時三十二歳の壮年であった。彼の当時の写真（巻末に掲載）を見ると、眉目秀麗の好男子

で、まさに慶応ボーイといった風情であった。マニラ港には菅原亥吉らが大雨のなかを出迎え、当時日本内地では到底お目にかかれない中華料理を馳走になり、上陸第一夜をマニラホテルに投宿する。上陸後世話になった菅原亥吉が奇しくも神戸一中の先輩であることを知り、日本紡績の西善三と共に、異郷の地であつて意を強くする。

濱田駿吉は、ルソン島南部サンタメサのパニキ農場（農場長中川氏）での綿花栽培を任される。サンタメサでの宿舎の確保に菅原亥吉の世話になった。その後タリアック州のダブパンの農場での綿花栽培に従事する。しかし現地地主や農民たちの非協力、比島の氣候風土に適合しない品種、人手不足、燃料（ガソリン）や肥料の不足、風水害、旱魃、病虫害の発生、ゲリラの襲撃による治安悪化、日本からの技術者や機材の未到着等のため成果を上げるに至らなかった。また短期間で広大な砂糖キビ畑を棉作地に転換することは実際には困難であった。

事態が緊迫したため、濱田駿吉も昭和十九年十二月軍に現地召集され貨物配属となり、物資の購入、保管の軍務に従事する。やがてリングエン湾に上陸した米軍がマニラへ迫ったので、昭和二十年一月上旬にトラックでマニラを脱出する。他に運転できる人がいな

いので、やむえず濱田駿吉が運転し、夜間は無灯火のままフルスピードで町や集落を通り抜けた。途中、トラックが故障したので、後は荷物をかついで歩いた。行く手には何の希望もなく、前途に多くの苦難が待ちうけていた。

北部山岳へ逃避行の途中、菅原亥吉、杉田義樹、金貨メリヤス社員の坂野喜寛（後に生還）と再会し、北バンパンの小屋で一時同居する。坂野喜寛は人柄の良い人で、あの苛酷な状況のなかで、よく菅原専務の身辺の世話をしていた。

一間四方のごく粗末な狭い瀬降り小屋で六人が暮らした。土間には二人、床には二人、柱上に二人、六人が交代で寝泊りする。逃避行の途中、大抵の邦人がマラリアに罹っていた。兵站病院には、もはやキニーネなどの特効薬がないので、どうしようもなかった。昔の人はミミズを煎じて飲めば熱冷ましになると云っていたが、残念ながらその時は思いつかなかった。菅原、濱田、杉田、坂野も同様にマラリアによる高熱と栄養失調に苦しんだ。

なお、ルソン島北部は悪性マラリアの多発地帯なので、邦人や兵士の殆んどがマラリアに罹り死ぬ人が多かった。だがルソン島南部に退避した兵士たちには不思議とマラリアの罹患者は少なかった。著者が読んだ

戦記ものには、北部山岳では夜中に蚊がものすごい唸りをたてて群がり、まるで拷問のようだったと書かれている。

最後の拠点、複郭陣地内の兵士や邦人にとって最大の問題は、米軍の砲撃よりも栄養失調とマラリア、アメーバ赤痢であった。ちなみに、ルソン島における日本軍の損害の第一位は餓死であって五〇％を超え、次はマラリアで四〇％に達したと云われる。一方交戦による戦死者は僅か一〇％程度であった。日本軍は、大敵マラリアに対する知識が極めて貧弱だったことが惨敗の大きな要因といっても過言ではない。

せいぜい二、三千人のイゴロット族の住む狭い溪谷地帯に、一挙に五万人余の日本人が入りこめば、その結果はあまりにも明白である。動ける者は食糧探しに出て、蛇、トカゲ、バッタ、コオロギ、ゴキブリ、蛙、芋虫、田螺、蝸牛、雑草など食べられるものは何でも取って来て皆で分け合った。ことに蛙は貴重な蛋白質源であった。雑草（南方春菊）、水藻、芋の葉や若木の芯を煮たりしてわずかに飢えを忍んだ。たまに野鼠を捕まえたときは大変なご馳走だった。鼠は人間が居る所には、どこにでも生息しているが、素早い鼠を捕らえるのは至難の技であった。捕らえた鼠は内臓を抜き、赤裸に剥き焼いて食べた。かなり上等な食糧で貴重品

であつた。また原住民が逃げ去つたあとの空家に押し入つて、隠してある食物を探し求めた。

全山到る所に死骸と糞だらけ。これが毎夜降る雨に流されて谷川に入るため、川は赤痢菌に汚染されている。従つて生水は一切飲めないもので、私たちは谷川の水を必ず飯盒に沸かして飲んだ。手持ちの米をいかにして持ちこたえようかと、毎日が食生活との戦いであつた。食事は一日一食（夕食のみ）、それも数えられるくらいの米粒に野草や小指くらいの芋切れを雑炊（調味料なし）にして、皆が牛の餌だと笑いながら食べた。そしていきなり山を越えて聞こえる爆音にあわてて火を消し息をひそめる。

夜になると瘦せ細つた体に虱が這い回りボリボリと掻きながら、皆の口から出るのは内地やマニラでの「うまい物」の話ばかりだつた。誰もが食糧の有難さが骨身にこたえたのだつた。その日その日が単調な長い一日であつた。月を見上げるたびに妻子を偲び、望郷の思いにしたつた。菅原専務は時々子供さんたちのことを嬉しげに語っていた。やがて菅原専務は、杉田義樹と男性邦人二人と百メートルほど離れた草ぶきのセブリ小屋に移り棲んだ。時々遠くから朝の挨拶を交わしたりした。

濱田駿吉は八月下旬に終戦を知つたが、本部からは

正式に何の指令も連絡もなかった。日本軍の負けであつた。戦場に銃声が止んだ。嬉しさも喜びも悲しみも悔しさも何の感情も湧いて来なかった。勝つても負けてもどちらでもいいから、早く日本に帰つて食ひ物に心配のない平和な生活をしたいと切望するのみであつた。

北部ルソンの山岳にあつては、毎日食べ物を求めて山野を彷徨しながら氣息奄々としており、何がどうなっているのか、くわしいことは何も分からなかつた。九月六、七日頃漸く待ちに待つた下山の命令を受けた。何故、もっと早く下山命令が出なかつたのか。下山命令が一日遅れることにより、どれだけ多くの人が死んでいったことか。誰もが栄養失調のため衰弱しており、下山途中に浅い小川さえ渡れずに溺れる者もいた。

濱田駿吉は九月十五日頃米軍に投降し、ソラノの捕虜収容所に移送された。下山途中で杉田義樹から菅原専務が病死したことを聞き、終戦を知りながら亡くなつたことで、さぞ無念だつたらうと、その死を悼んだ。幾度かの死地を脱して運よく生還できた濱田駿吉には、空しく彼の地で散つた上司や同輩に対して生き残つたものの負い目のようなものをずっと長く感じておられたことと思う。

米軍の十分な給与と手厚い看護により極度に衰弱した体が漸く回復したので、通訳の仕事を手伝う。収容

所内では米軍兵士が、病人に寛大で、邦人の女子供に優しく親切に対応しているのを見て、あまりに想定外のことで驚き感動する。濱田駿吉は九死に一生を得て、昭和二十一年十二月無事に帰国する。産業戦士として勇躍渡比した大和紡績の社員六十六人のうち運よく生還できたのは僅か四人だけだった。誰もが戦後ずっと死んだ仲間たちに相済まない複雑な辛い思いであつた。

ルソン島山中での避難生活を思い起こせば、胸が痛む。ことに山中放浪の女子供たちのことを思い出すと涙が出てならない。飢えの世界では、赤裸々な生身の人間だけが存在する。空腹と飢えとは違う。飢えに飢えてもなおかつ文明の倫理を失われなかった人も、もちろんいただろう。しかし、そういう人はよほどのことがない限り生きて還れなかつたろう。当時はもう自分のことで精一杯で、他人の生死に関わる気力もなかつた。こうして何とか生還できたのは、好運以外に生に対する執念、気力のおかげだと思ふ。

(注) 濱田駿吉は、明治四十三年十月十九日生れ。昭和八年に慶応義塾大学経済学部卒。ホッケーの名選手として、昭和七年のロスアンゼルス・オリンピックと昭和十一年のベルリン・オリンピックに日本代表として出場する。ロスアンゼルス・オリンピックで受賞した銀メダルは、

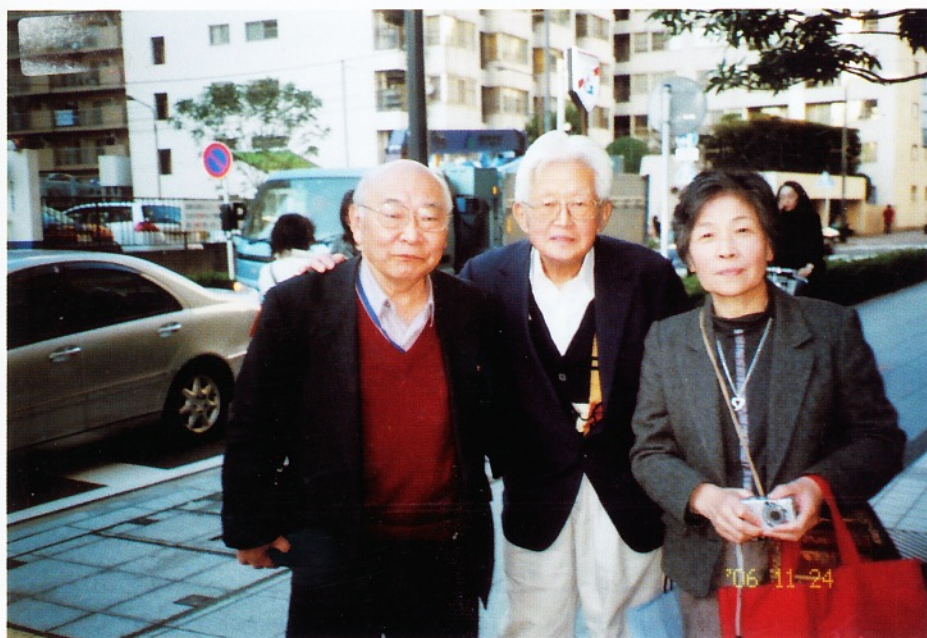
平成十八年二月に母校の慶応義塾大学のホッケー部創設百周年記念式典の席上で母校に寄贈する。

復員後は大和紡績に復職し、同社の常務取締役を経て系列会社(株)OM製作所社長(東京証券一部上場)を歴任。平成二十一年十二月七日東京で逝去(九十九歳)。

なお、奥様の政子さんは国立がんセンターの初代総長田宮猛雄氏の息女で、平成十六年三月に亡くなった。



右側はマニラ在留時代の浜田駿吉氏
左側は竹中正一郎氏（浜田氏の義弟）



平成十八年十一月二十四日、横浜にて
真中が浜田駿吉氏、両側が著者夫妻

著者略歴

菅原 惇 (すがはら・あつし)

昭和6年5月フィリピン・マニラ市で出生（当時はアメリカ領）。
昭和16年6月帰国。

東京電機大学電機学校電気科及び慶応義塾大学経済学部（通教課程）、中央大学法学部（通教課程）を卒業。

国立療養所福寿園及び国立療養所村山病院勤務（栄養士）を経て、
昭和29年8月国民金融公庫に就職。

定年後、平成6年6月中小企業金融公庫に就職（嘱託、社会保険
労務士）。平成13年3月退職。

昭和57年10月東京労働基準局長より労働衛生功績賞を受賞。

平成11年10月労働大臣より労働衛生推進賞を受賞。

現住所：千葉県船橋市七林町123-61

七父の人生の軌跡

往 時 茫 々

—書き残しておきたい
元マニラ在留邦人の活躍と逃避行

平成24年1月3日出版

編著者 菅原 惇

印刷所 (有)草の実工房すずき印刷